

全学共通カリキュラム運営センター言語系科目構想・運営チームリーダー／ 中国語教育研究室主任／外国語教育研究センター教授 森平 崇文

まず『大学教育研究フォーラム』第31号に寄稿いただいたみなさま、編集に協力いただいたみなさまに感謝申し上げます。本号は「全学共通科目のこれまでとこれから」というタイトルの通り、特集で西原廉太先生、井川充雄先生、山口和範先生に座談会形式で全学共通科目のこれまでとこれからを語っていただきました。私も座談会を傍聴しましたが、全学共通科目が本学における教育改革の運動体である点を強調されていたのが大変印象的でした。昨今のコスパやタイパといった視点からみると、教員にとり全学共通科目への関与は負担に感じることがあるかもしれません。義務として参加する教員が多くなれば全学共通科目を運営する組織は形骸化し、運動体として機能しなくなります。全学共通科目の理念と使命に賛同し、本学の教育をよりよいものにしていきたいと願う各教員の熱意のリレーがあってこそ、全学共通科目は運動体として機能し続けられるのだということを再認識しました。

この点は本号のシンポジウム筆録でも同様です。石井剛先生の基調講演では、東京大学の東アジア藝文書院における学術フロンティア講義「30年後の世界へ」での、本学の河村賢治先生の事例報告では全学共通科目のコラボレーション科目「SDGs×AI×経済×法」での、それぞれの取り組みについて紹介されています。自ら企画を立ててコーディネートを担当し、学内外から相応しい複数の講師にオファーし、自分の担当回ではない授業にも参加して質疑応答などで授業を盛り上げ、リアクションペーパーの採点を行い、成績評価を出していく。効率だけをみればまさに自ら負担を増やしているだけと映るかもしれません。しかし両先生のお話からは、自分の専門領域以外の研究者や第一線の現場にいる専門家と交流し、新しい知見が得られることの楽しさがそれに付随する負担感を上回っていること、そして科目担当者が楽しいと感じればそれが履修生にも伝わっていくのだというメッセージを受け取りました。今回のシンポジウムをきっかけに私自身も、全学共通科目にて他分野の研究者や専門家と交流し、その楽しさを履修生に伝えるコラボレーション科目に参与したいと考えるようになりました。

事例報告としてもう一つ、山田康裕先生の「合理的配慮のための建設的対話」も大変考えさせられる提言です。私が中国語教育研究室主任となった2020年より現在に至るまで山田先生はしょうがい学生支援室長として、しょうがい学生支援会議の進行を担当されてきました。特定の時期だけでなく、一年を通じて学生からの申請があるたびに断続的にしょうがい学生支援会議は開催されています。中国語履修者だけでも年間で5名以上はいますから、山田先生はじつに多くの学生の個別状況に合わせた支援体制について、丁寧に議論を重ね、対応を考えてくださったのだと、本当に頭が下がる思いです。全学共通科目には言語やスポーツなど、双方向的な授業形態が多く、山田先生の提言さ

れている、科目担当者がしょうがい支援対象となった学生に対し丁寧かつ具体的に説明する努力を怠らず、しょうがい学生の支援に関する知識の更新に意識的であることの重要性を、より胸に刻みたいと思います。

もりだいら たかふみ